

30 年の交流をどう生かす？ ～鹿児島県とシンガポールの継続的交流～

シンガポール事務所

鹿児島県とシンガポールは、1982 年に「第 1 回鹿児島・シンガポール交流会議」を開催して以来、同交流会議を 2 年に一度、鹿児島とシンガポールで交互に開催し、この会議を核としながら 30 年の長きにわたり経済・観光、芸術・文化、青少年など幅広い分野における交流を行ってきている。

2012 年 1 月 17 日に、シンガポールでは 4 年振りに「第 16 回鹿児島・シンガポール交流会議」が開催され、様々な関連イベントも交流会議に合わせて開催されたので、その様子を報告する。

1 交流会議の概要

会議には鹿児島県から伊藤知事、金子県議会議長、福元かごしまクラブシンガポール会長、足達 CLAIR シンガポール事務所長等、シンガポール側からサム・タン外務省上級政務次官、国際企業庁、政府観光局、芸術振興局、人民協会等の政府機関代表者が出席した。



会議の様子

会議では、農畜産物の輸出振興、観光交流の促進、シンガポール企業の鹿児島への投資促進、霧島国際音楽祭等の芸術交流の継続等が合意に至り、今後も幅広い分野で交流を続けていくことが確認された。

今回の会議のシンガポール政府側のトップであるサム・タン上級政務次官は、26 年前に青少年交流事業で鹿児島を訪問した経験があり、鹿児島とシンガポールの交流の長さを実感した。

2 関連イベント

交流会議に合わせて、「鹿児島黒牛」、「かごしま黒豚」などの県産品の販路拡大や、シンガポールからの観光客の更なる誘致を図るため、レストラン・フェアや観光セミナー等の関連イベントが実施された。



「Sky on 57」での試食会

(1) レストラン・フェア

「マリーナ・ベイ・サンズ」のスカイパークにあるレストラン「Sky on 57」で、

約 1 ヶ月に渡り、鹿児島県産品を使ったメニューを提供するレストラン・フェアが開催された。

そのオープニングとして、知事出席のもと、メディア関係者等を招待した記者発表及び試食会が開催された。試食会では、「Sky on 57」のオーナーシェフであり、シンガポール有数のセレブリティシェフとして活躍するジャスティン・クエック氏が、自ら鹿児島に足を運び厳選した鰯、桜島大根、安納芋、筍、かぼちゃ、黒豚、黒牛等を使ったメニューが招待者に振る舞われた。

シンガポールでは「日本食」として提供されることが多い日本の食材を、洋風創作料理にアレンジしたメニューは招待者に大変好評であった。

(2) 県産品商談会

鹿児島県内から、黒牛、黒豚、水産加工品、お茶、焼酎等幅広い分野から 19 団体が参加した商談会が開催され、シンガポールのレストラン経営者や流通業者を対象に鹿児島県産品の売り込みを行った。

日本産食品は、現在でもある程度の人気と認知度はあるが、高品質のものを輸入するとどうしても高くなってしまいうため、現在は富裕層向けの「高品質高価格」の商品が中心となっている。しかし、1 人あたりの GDP が日本を越え、いわゆる中間層が増えてきているシンガポールにおいては、そういった層が日常的に購入できる「中品質中価格」の商品も揃えることが、売り上げ拡大につながるのではないかと感じた。



商談会の様子

(3) 観光セミナー

震災で激減している観光客を呼び戻そうと、観光セミナー・商談会が開催された。セミナーでは、県国際交流課のシンガポール人国際交流員のプレゼンが行われ、現地旅行会社に「Kagoshima」の魅力を PR した。

県観光課の本（もと）課長によると、「福岡便は東京便に比べ便数が少ないため、価格で太刀打ちするのは難しいが、黒豚しゃぶしゃぶや砂蒸し温泉など鹿児島でしかできない体験を売りにしたい。」とのことであった。

こういった鹿児島の独自性をアピールするとともに、観光客は鹿児島だけでなく九州各地を周遊することが多い（逆に言うと鹿児島だけを目的に来ることは少ない）ことから、今後は九州内の他の地域と協同してプロモーションを行うことも効果的であると感じた。

(4) チンゲイ・パレードへの参加

毎年旧正月に開催しているシンガポール最大のパレード「チンゲイ・パレード」へ、鹿児島女子短期大学の学生で構成される「ヤング踊り連チーム鹿女短」が参加した。今回はチンゲイ・パレード 40 回目の節目であり、水を張った道を進むという、今までにない趣向となった。

「ヤング踊り連」は鹿児島伝統の「おはら節」や「ハンヤ節」をアレンジした躍動的なパフォーマンスで観客を魅了した。



「ヤング踊り連」のパフォーマンス



リー・シェンロン首相と

3 今後の展望

高い経済成長を続け、世界的に常に注目を浴びているシンガポールが、継続的に交流を行っている日本の自治体は鹿児島県が唯一であり、今後もおそらく増えることはないと思われる。

また、30 年もの間継続的に交流を行っていることで、交流事業等で鹿児島に来たことのある方が政府機関の要職に就いているケースが出てくるなど（サム・タン上級政務次官もその一人）、これまで培ってきた人的資源も豊富といえる。

ただ、鹿児島県側としては、こういったアドバンテージを生かし、今後も継続的な交流を行っていきたいと考えているが、シンガポール側としては交流することで何かメリットがなければ続ける理由はない、というようなシビアな姿勢になりつつある。

次回は 2 年後に鹿児島で開催することで合意したが、今後は（特に鹿児島県側として）財政的な制約のある中で、こういった方向性で交流を続けるかが大きな検討課題となる。

この交流は国（シンガポール政府）と自治体（鹿児島県）の継続的な交流という珍しいケースであることから、自治体にしかできない、より地域に根差した交流活動や、地域の独自性を生かした交流活動を続けることで、経済面でも文化面でも双方が発展していけるような関係を築いていくことが重要であろう。

(片野田元所長補佐 鹿児島県派遣)